

## 保健師が捉える中山間地域の中学生への 思春期健康支援の現状と課題

大野理恵<sup>1)</sup>・長鶴美佐子<sup>1)</sup>・長友 舞<sup>1)</sup>・坂元夏美<sup>2)</sup>

key words : 保健師, 中山間地域, 中学生, 思春期健康支援

### I. はじめに

中山間地域の中学生は、心身の変化が大きい思春期に、高校進学のために保護者のもとを離れる。この時期は性への関心も高まる時期でもあり、親元を離れ、新たな環境に身を置く子どもたちには、性教育をはじめとする「自己の心身を大切に、セルフケアできる」思春期の健康支援がより必要とされる。数少ない中山間地域の性教育に関する研究では、中山間地域の中学生の性行動や性意識は全国平均とほぼ変わらない<sup>1)</sup>とされている。また、中山間地域の教師が、性教育実践への困難感や戸惑いを抱いている<sup>2)</sup>ことは報告されているが、中山間地域の保健師がどのようなことを考え、現状をどのように捉えているかについては明らかにされていない。

中山間地域の子どもたちの成育環境とそこにおける育ち、また高校進学による離村後の生活環境の変化を踏まえた思春期健康支援は、どのようにあるべきなのだろうか。特に中学生に対し、学校からの依頼によって年に1コマ程度の健康教育や性教育を実施するなど思春期健康教育における一端を担うことが多い中山間地域の保健師が捉える現状と課題を明らかにすることは、離村していく中山間地域の中学生への健康支援に取り組む上での示唆となり、その充実をもたらすと考えた。

以上をふまえ、心身の変化が大きい思春期に、高校進学で保護者の元を離れる中山間地域の子どもたちへの健康支援のあり方を検討するため、この支援の一端を担う中山間地域の保健師への半構成的面接法から、中山間地域の保健師が捉える中山間地域の中学生への思春期健康支援の現状と課題を明らかにするために本研究に取り組んだ。

### II. 目的

中山間地域の保健師が捉える中山間地域の中学生への思春期健康支援の現状と課題を明らかにする。

### III. 方法

研究デザインは半構成的面接法を用いた質的帰納的研究である。研究対象者はA県の中山間地域3ヶ所の村の保健師8名で、データ収集は平成30年3月～8月に行った。分析では、まず録音されたインタビュー内容を逐語録にし、現状と課題が語られている文脈をデータとして抽出しカテゴリー化を行った。なお、カテゴリー化においては研究者間で一致を見るまで検討を重ねた。

本研究では、思春期健康支援を「思春期の子どもたちの健全な成長発達を促すための、思春期の特徴や心身の変化を踏まえた様々な健康支援で、具体的には、思春期教育・性教育・生活指導を含む健康教育などの支援(集団指導だけでなく個別指導も含む)」、中山間地域を「都市や平地以外の中間農業地域と山間農業地域の総称であり、本研究で扱う3村は、A県の地域振興条例第2条に該当する村」と定義し用いた。なお、本研究で対象とした3村は、人口3000人未満の村である。

### IV. 倫理的配慮

本研究の趣旨と研究への参加協力及び撤回の自由の保障、対象者の匿名性およびプライバシーの保護、研究成果の公表等を文書および口頭で説明し、書面にて同意を得た。本研究は宮崎県立看護大学研究倫理委員会(承認番号第14号)の承認を得て実施した。

## V. 結 果

以下、現状のカテゴリーは【 】, サブカテゴリーを< >で示し、保健師の語りであるデータを「斜字」に表した。

( ) は研究参加者の語りの意味を理解しやすいように、研究者が文言を補足したものである。

### 1. 保健師が捉えた中山間地域の中学生への思春期健康支援の現状

35 データから、10 サブカテゴリー、3 カテゴリーが生成された。

#### 1) 【人間関係構築経験の少なさや未熟さ】(15 データ)

生成されたカテゴリーから、中山間地域の思春期健康支援に携わる保健師は、以前と比較して、中山間地域の子もたちの<人間関係の希薄化>を感じていた。また、中山間地域特有の<限られた社会関係>の中で生活することで<大事にされる子どもたち>は<異性を意識しない男女関係>という生活特徴を持っていると考えていた。さらに、いざ進学等で社会関係が広がった時に子どもたちは<大集団への適応力の乏しさ>という特徴を持つと感じていた。

「なんか向こうに高校に行ってからすごく(交友関係や男女関係)ギャップを感じるんじゃないかなってすごく心配する。」「いざ団体に入りましようとなった時になかなか対応ができてないというのが見受けられるのを感じてしまう・・・。」

#### 2) 【医療専門職者の協力の得にくさ】(6 データ)

中山間地域では<多様な専門職者の協力が必要>と感じながらも<地理的環境によるマンパワーの不足>を感じていた。

「やっぱり、(性教育とか健康講話を)話してくれる人材が少ないということですかね。」「(いろんな専門家達の方も)借りたいですね。」「だから(看護大学の)先生とかがこうやって来てくださるのがいい。」

#### 3) 【学校の先生との温度差】(14 データ)

学校教育の中に入ることでの<思春期教育に十分な時間を確保することの困難さ>を抱き、<リアルな言葉に過敏に反応する学校>側との危機感の違いから<思春期教育に対する学校の先生との温度差>を感じていた。

「時間が限られているのと、学校教育に入っていくってのがすごく難しく、時間をやっぱり確保するのがなかなか難しい。」「やっぱり学校というところは、ちょっと難しいところがあって・・・なんかリアルに言っちゃってもいけないようなところがあるけど、私としては、なんか事実のものは(事実としてリアルなことも)ちゃんと伝えてほしいかなとは思ってますけど。」「先生は、3年間しか見てないんですよね、この3年間、平穏無事に終わればという・・・。私たちはその子の生涯を見てるので。」

### 2. 保健師が抱く中山間地域の中学生への思春期健康支援における課題

36 データから、13 サブカテゴリー、4 カテゴリーが生成された。

#### 1) 【幼少期から継続した性教育】(13 データ)

保健師は<生命についての教育>を思春期だけのものではないという<特別でない性教育>として認識してもらえるように<親を巻き込んだ教育支援><親への性教育支援>を含めたく<幼少期から継続した性教育>の必要性を感じていた。

「思春期の支援って積み重ねだと思うんですよ。思春期だから始まるっていうか、やっぱり、いきなり初めてでも戸惑いが大きいだろうから、小さい頃からの積み重ねだろうと思うんですけど。」「なんか、もうちょっと小っちゃい時から、なんか受けていくと(性教育なんか)当たり前みたいな話にならないかな〜と。なんかこう、特別じゃなくて。日常の一部みたいなかんじですね。」「保護者が、何らかの場面でそれにちゃんと気づいて、どこの時点からどんな風にやっていくか、食育なのか家庭教育なのかはあれ(不確か)なんですけど、積み上げていくと(離村する)15歳の時に(安心して)行ってらっしゃいっていいのかなって。」

#### 2) 【支援体制の構築】(8 データ)

中山間地域の保健師は、<専門職者の支援>を求めており、さらに<学校の先生の高い意識づくり>のために<学校の先生が学ぶ機会の確保>も必要であると感じていた。

「やっぱり思春期という独特のものがありますよね・・・。やっぱり人間相手じゃないですか。先生方も一緒に先生方用の講座、思春期ってこんなもんだよっていうのを先生方が学べる講座があればいいのにな〜って思う。」「何かをやるのも限界があるので(大学の)先生たちが入ってくださるのが非常にありがたい。」

#### 3) 【日常生活力の獲得】(8 データ)

また、離村に備えた<食生活における自立>や<生活全般における自立>に加え、子どもたちが<電子媒体に対する危機感を持つこと>が必要と感じており、これらから【日常生活力の獲得】の必要性を感じていることが明らかになった。

「(性教育)そこだけじゃなくて根本的に生活自体もあるんだなと思いました。」「なんかいろいろいっぱい、その、性教育だけじゃない食育とかメディアのこととかいろいろ伝えないといけないことはあるかなって思ってますけど。」

#### 4) 【子どもの自律心を養う】(7 データ)

限られた社会関係の中で獲得しにくい<選択肢が広がるような知識の提供>や<周囲に流されない意識の構築>をすることで【子どもの自律心を養う】必要性があると感じていた。

「あの子は進んでるとか、高校に行ったらあるんですけど、それは人は人だし、自分は自分を持っていいんだよっていうことをしっかり(中略)言ってほしい。」「生活全般に情報提供なり、自分たちが選択できるようにいろんな情報とか知識とかはあった方がいいのかなと思います。」

## VI. 考 察

### 1. 保健師が捉えた中山間地域の中学生への思春期健康支援の現状

今回明らかになった【人間関係構築経験の少なさや未熟さ】【医療専門職者の協力の得にくさ】【学校の先生との温度差】などの中山間地域の保健師が捉えた課題には、中山間地域の中学生の成育環境の特徴が大きく影響していると考えられた。

中山間地域で子どもたちと関わる保健師は、中山間地域の子どもたちは、少人数の学校生活等の限られた社会関係の中で大事に育てられており、進学等で大集団の中へと自己を投入し社会関係を拡大する時に適応力の乏しさが見られると捉えていた。

これは、保健師が、一般的に子どもたちは小中高という発達段階で人間関係を学んでいくものであり、特に思春期は多様な人々と出会い、互いに影響し合いながら自己を確立していく重要な時期である<sup>3)</sup>と捉えているためと推測された。しかし、中山間地域では、限られた集団の中で生活しているため、人間関係構築経験が乏しいまま、このように高校進学の時期に新たな人々との出会いで初めて大きく人間関係の拡大を経験することとなる。この現状を保健師は感じ取り、子どもたちの成育環境がその戸惑いの誘因となり、それによって生じる問題があると捉えているのだと推察された。

そのため、保健師は中山間地域の子どもたちの成育環境における「男女関係」や「交友関係」などの【人間関係構築経験の少なさや未熟さ】が進学先で思春期の心身の健康問題を引き起こす一因と捉えていたと考えられた。

また、保健師は、性教育を行う上で【学校の先生との温度差】を感じており、教師自身の知識や意識向上を求めている。教師自身もスキルのなさから性教育への困難感や戸惑いを抱えている<sup>4)</sup>ことは報告されているが、このことは、子どもたちとの関わりが比較的短期間となる教師と幼少期から長年の関わりがある保健師の立場とを比較して捉えた現状といえると考えられる。そのため、中山間地域の保健師が保健師、看護師、医師等の思春期健康支援を担う医療専門職等の「専門家のサポート」や「多様な連携」の少なさを指摘していることは、その必要性を示しているといえよう。

### 2. 保健師が考える課題

中山間地域の保健師は、【幼少期から継続した性教育】

【日常生活力の獲得】【子どもの自律心を養う】【支援体制の構築】の必要性を実感していた。

このように、保健師が親や地域住民、教師を巻き込んだ幼少期からの継続した関わりでの必要性を感じていることは、子どもたちが幼少期から正しい情報を獲得、選択し、社会関係の広がりにおいて、自己をしっかりと持ち、周囲の環境に流されない自律した心を持つことを望む保健師の願いの表れでもあるといえよう。また、保健師が【子どもの自律心を養う】ことを重要と捉えている点については、子どもたち自身が個人の行動における判断力を身につけることや、他人に意思を伝えること、日常的に接触する多くの情報を取捨選択できることなどを教育していきたいと考えているためと思われる、自己の行動に責任をもって生きることの大切さや人間関係の在り方等、広義の内容の教育の必要性を感じている結果といえよう。現に、性の自己決定については行動コントロール感や意思決定が強く影響し<sup>5)</sup>自分の意見や意志をしっかりと持つことが大事と示唆されているため、保健師はこのことから子どもたちの自律を重要と考え慮っていることを表しており、性教育をする上でも重要なこととして捉えているのだと考えられた。

さらに、中山間地域の子どもたちへの教育課題として明らかとなったことは、【日常生活力の獲得】であった。中山間地域の保健師が性教育の必要性にとどまらず、「食生活や掃除」「洗濯等」の「日常生活力」や、携帯電話などの「メディアとの付き合い方」など、【日常生活力の獲得】の必要性を感じていることは今後の思春期教育に新たな課題を示していると考えられる。

特に、「メディアとの付き合い方」に関しては、中山間地域の子どもたちは、小さな集団の中で幼少期から男女関係なくきょうだいのように育ち、男女交際の経験が少ないという特徴がある一方で、携帯電話等での SNS やインターネット等の普及により、容易に性的な情報が入りやすい状況にある。そして、離村によってより性が身近にある環境に身を置くことになるため、より保健師は中山間地域の子どもたちへの教育の必要性を感じていると考えられる。これらは、中山間地域で長年子どもたちの健康支援を担っている保健師ならではの視点であり、中山間地域の子どもたちは【人間関係構築経験の少なさや未熟さ】を持つという特徴を踏まえて思春期健康支援を行うことの重要性を示すものと考えられる。

今回の研究で明らかになった中山間地域の保健師が抱く中山間地域の中学生への思春期健康支援における課題は、支援体制の構築を図ることと、子どもたちが日常生活力を獲得し、自律心を養えるように幼少期から継続した性教育を行うことであった。

本研究の結果においては、中山間地域以外の保健師も捉えていると思われる現状と課題も含まれていたが、先行研

究がなく中山間地域特有のものかどうかの検討ができていないことは否めない。しかしながら、このように中山間地域の保健師が感じていることは重要な教育指標であり、中山間地域で思春期健康支援を担うことの多い保健師が行う中山間地域の特徴を踏まえた思春期健康支援の一つの方向性であると考えられた。

## Ⅶ. 結 論

中山間地域の保健師は、中山間地域の中学生への思春期健康支援において「人間関係構築経験の少なさや未熟さを念頭においた支援」の必要性を感じていた。また、その展開においては専門職の協力を得て支援体制の構築を図ること、中山間地域の保健師として子どもたちの「日常生活力の獲得」や、「幼少時からの継続した性教育」が課題と捉えていた。

本発表に関連し開示すべき利益相反はない。

## 引用文献

- 1) 西頭知子, 佐々木くみ子, 末原紀美代: 過疎地に住む中学生の性行動と性意識に関する調査研究, 母性衛生, 53(1), p.81-88, 2012.
- 2) 西頭知子, 佐々木くみ子, 佐々木綾子, 他: 過疎地中学校の性教育の現状分析から過疎地中学校のセクシュアリティ教育構築への提言, 大阪医科大学看護研究雑誌, 3, p.109-119, 2013.
- 3) 野中利子: 思春期のより良い親子関係—心おきなく子育てを卒業するために—, 星和書店, p.6-7, 2005.
- 4) 西頭知子, 佐々木くみ子, 佐々木綾子: 過疎地中学校教師のセクシュアリティに関する教育への取り組み, 大阪医科大学看護研究雑誌, 3, p.18-28, 2013.
- 5) 西頭知子, 佐々木くみ子: 若者の性とセクシュアリティ教育の現状に関する文献検討, 大阪医科大学看護研究雑誌, 2, p.95-102, 2012.